
Blood Lily

月詠暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Blood Lily

【Nコード】

N3972Z

【作者名】

月詠暁

【あらすじ】

人間の地肉を喰らう化け物・吸血鬼^{ヴァンパイア}。300年前、人間たちは彼らを粛清するため、吸血鬼の虐殺を行なった。そしてその惨劇は、ひとりの吸血鬼の復讐により、「紅の惨劇」へと変わっていく。

時は進み、六代公爵家のひとつ、フェルバルド家の長男であるノエル・フェルバルドは、塔に幽閉されているひとりの吸血鬼を見つける。少女の姿をした吸血鬼には、記憶がなかった。

そして、彼女はノエルに囁く。禁断の甘い血の契約の言葉を。

opening

街全体が紅く染まっていた。

炎と血とが混ざり合って、漆黒の夜の中を真昼のように明るく照らす。悲鳴があちらこちらから聞こえており、そして消えていった。負傷した者、もうすでに息絶えた者、まだ逃げ惑う者。

何かを叫びながら怯える彼らに迫るのは、百をも越える人の姿をした化け物だった。

女子ども容赦なく、次々と老若男女関係無しに殺戮を繰り返す彼らの目には、復讐の念が宿っていた。

そして、化け物の群生の中心には、恐ろしいその惨劇を冷酷に見下ろしている、ふたつの瞳。まだ微かに幼さの残るその瞳は涙を流しながら、けれどもまっすぐに人間たちが襲われる様を見て

不敵に、笑みをこぼしていた。

人物紹介

ノエル・フェルバルド

男 17歳 177センチ 55キロ

六代公爵家のひとつ、フェルバルド家の長男。美しい黒髪に翡翠色の目を持つ。

容姿が綺麗なため、年上からモテる。

好奇心旺盛で、スリルを味わうことが好き。時々オネエ口調だが、それはわざと。

リリー

女 外見年齢は十代半ば 155センチ 40キロ

塔に幽閉されていた記憶の無い吸血鬼。艶やかな長い黒髪に、漆黒の瞳を持つ。

性格はかなりポジティブで子どもらしい。ノエルの血を好む。

どうして幽閉されていたのか、自分が誰なのかは覚えていない。

キッシュ・フィオーネ

男 19歳 185センチ 60キロ

六代公爵家のひとつ、フィオーネ家の長男。赤毛。かなりマイペース。

ノエルの幼なじみで悪友。

両親は昔に事故で亡くなっており、かわりに祖父がフィオーネ家の当主を収めている。

ニッケ

男 外見年齢は十代後半 175センチ 50キロ

フィオーネ家で居候している吸血鬼。銀髪で眼帯をしている美青年。

どこか影を持つ青年で、キツシユの護衛係を任されている。

シエリア・シャルロット

女 15歳 145センチ 37キロ

六代公爵家のひとつ、シャルロット家の長女。金髪碧眼で人形のような容姿。

亡き母親から躰と称された虐待を受けており、左半身に火傷の痕がある。

優しい性格だが、他人に自分の心を覗かれることを嫌う。

ヴィルヘルム

男 外見年齢は二十代前半 188センチ 65キロ
シェリアと契約している吸血鬼。茶色の天然パーマで、黄金色の瞳を持つ。

数年前、瀕死のところをシェリアの血によって助けられ、その日から献身的に尽くす。

シェリアの命令によって、彼女の母親を殺害した。

用語説明

ヴァンパイア
吸血鬼

動物の血肉を喰らう化け物だが、容姿は人間となんら変わらない。純血である者と、そうでない者とに分けられる。

吸血鬼と人間の性行為は可能で、その間に生まれた子どもは半分吸血鬼の血を引いている。

驚異的な治癒能力と長い寿命が特徴。また、地位的には純血の吸血鬼が上である。

基本死なずに長い年月を生きるが、心臓を刺せば息絶える。

吸血鬼粛清法

昔、規制されていなかった吸血鬼は本能のままに人間を襲っていた。

そのため、六代公爵家が考え出した法律。

吸血鬼を殺戮しろ、というものであり、多大なる死者が出た。この法律は廃止されている。

紅の惨劇

吸血鬼粛清法に反対した吸血鬼たちが起こした、六代公爵家を襲った事件。

主犯はひとりの吸血鬼らしい。

六代公爵家

6つの公爵家からなる吸血鬼規制機関で、この公爵家らがいることで、吸血鬼と人間の均一がとれている。吸血鬼と契約している者もいる。

決して親しい愛柄といわけではなく、対立している家柄もある。

血の契約

吸血鬼と人間同士で行われる契約。これにより、吸血鬼はマスターが死ぬまで傍に付き従うことになる。

吸血鬼側にはメリットは無いが、長年の寿命の暇つぶしとして、自ら契約者を探す者もいる。

中には情が移り、献身的に尽くす吸血鬼もいる。

出会い

日曜の昼下がりは、いつも退屈だ。

某国にある深い森を抜けて、小だかい丘の上にその屋敷はあった。豪華な造りの、使用人たちが何人も働いていそうな、一目で金持ちが住んでいると分かる屋敷。

赤い高価そうな絨毯が敷き詰められた大広間を抜けて、黄金色に輝く手すりのある階段を上って右に曲がると、小さな部屋がある。

小さいと言っても、ひとりべやにしては十分な広さだ。綺麗に片付かかっている部屋の中央に、その人物はいた。

「いやはや……こつも退屈だと、参っちゃうでしょ」

漆黒の髪に、整った精悍な顔立ち。格好いいというよりは綺麗といったほうがいいかもしれない。伏せられた瞼は眠そうで、まつ毛はとても長い。

椅子に深く腰を下ろしており、両足はテーブルの上に組んでいる。手に持っていた本をそこに置き、それはそれは退屈そうに欠伸をした。

「なんか……おいしいニュースでも無いもんかねえ」

彼の名はノエル・フェルバルド。

フェルバルド家の一人息子であり、17歳という若き次期当主候

補である。いつもなら家庭教師である女教師がガミガミとうるさく勉強しろと喚くのだが、今日は用事があるとかで休暇をとっていた。予定がすっかりからになったため、退屈すぎる。

チラツと窓の外から見えたのは、幾度も続く森と、屋敷のすぐ裏に建っている塔だった。

幼い頃から両親に、あの塔だけには入ってはいけないと言われてきた。化け物がいるからと説明されていたが、きつと大罪を犯した吸血鬼でも幽閉されているのだろう。

フェルバルド家は、吸血鬼と人間の共存を望む六代公爵家のひとつだ。違法を犯した吸血鬼を粛清する役割りもになっている。

「吸血鬼……ねえ」

ノエル自身、何度か吸血鬼を目撃したことがある。しかし、彼らはきちんと理性を持っていて、とても紳士的だった。時々女性の吸血鬼から血を求められたこともあったけれど、上手く対処すればいい関係にもなる。

今や吸血鬼も人間も、同じように社会に馴染んできている。街でバツタリ彼らに会うということも、あまり珍しい話ではない。彼らが陽の照る場所に出てこれるのなら、という話にもなるが。

ノエルは、ニヤリと八重歯を見せて笑った。

いまは両親は出かけていて不在だ。頑固に怒鳴る家庭教師もいない。使用人は数人いるが、まさか自分が屋敷から抜け出そうと考えていることを思いもしないだろう。

好奇心が勝り、そつと部屋から抜け出す。幼い頃に見つけた裏口への秘密ルートをシュミレーションしながら、足音を忍ばせつつ、一階まで降りる。

幸い、使用人にも見つからず、案外楽に外へ出ることができた。

「……やっぱ、近くで見るとデケエなあ」

ノエルの前にそびえ立つ、巨大な古塔。長年誰も手入れをしていないのか、草のツルが伸び放題で、塔に絡みつくように巻かれてある。

古びた扉は既に腐っており、足で蹴倒せば簡単に開くことができた。

湿っぽい空気と、刺激臭が鼻を襲う。少ししかめっ面をしたものの、好奇心は衰えず、ノエルは中に入っていった。

すぐに石段があり、それがずっと上まで続いている。

運動がてらちようどいいと、ノエルは駆け足でそれを登っていった。

行き着いたのは、古い牢だった。鉄格子があり、どれもこれもが錆びれている。だけど、それは目を凝らさないととてもとも見えなかった。

それほど暗く、光がない。窓もないので、空気がひどく重たい。

匂いに耐えながら、手探りで壁に触れ、脆そうな箇所を見つけ、思い切り手で叩いてみた。

すると、下の扉と同じように、簡単に壁も崩れる。そこから差し込んだ光は、中の様子を鮮明に映し出した。

「……………っ」

目が、合った。

ノエルの体が硬直する。息さえもしていない。彼の眼球が捉えたのは、ボロボロの毛布にくるまっているひとりの人間だった。否、人間かどうかは分からない。もしかすると、吸血鬼かもしれない。

それは髪の毛を身長の数以上に伸ばしており、ボサボサで、腐臭が漂っていた。体も汚れており、長年風呂に入っていないことが分かる。性別も分からず、年齢も外見すら不明だった。

「……………アンタ、誰だ」

先に口を開いたのはノエルだった。

少しずつ落ち着きを取り戻し、最初にそう切り出す。口調は軽い。その手はズボンのポケットに収まっているペーパーナイフに触れていた。

毛布の人影は言葉を発せず、じっとノエルを見ている。動きもせず、ただじっと。

「人間か？ 吸血鬼か？」

その問いに、ピクリと人影が動いた。そして、

「ニンゲン…………？」

そつと言葉を吐く。そして、のそりと立ち上がった。

それに驚き、ノエルがナイフを取り出す。その際、取り出し方を少し間違え、人差し指を刃で切った。

少量の血が床に落ちる。

くんと鼻を鳴らして、人影は途端に毛布を捨てて、ノエルに向かって走り出した。いままでの気力の無さが嘘のように。

突然襲いかかってきたそれに驚愕し、ナイフを落とす。動揺し、手を振り上げて撃退しようとするが。

「……っ、へ？」

その手を掴まれ、乾いた唇に吸い寄せられる。舌を絡められ、音をたてて指をしゃぶられる。あまりの出来事に呆然とそれを見ていて、それが指をしゃぶっているのではなく、傷口から滲んだ血を舐めていることに気づいた。

「……ああ、アンタ吸血鬼か」

血の匂いが本能を刺激したのか、さうとう飢えていたのだろう。傷口を開こうと、尖った犬歯が思い切り指に食らいつく。

「ッ」

鋭い痛みが走ったが、耐えた。小さな子犬のようなそれは、体格からして少女だろうか。目が合った時に思ったが、澄んだ瞳が綺麗だった。

ノエルはそっとしゃがみ、少女の口元に自らの首筋を差し出す。

「飲め」

短くそう命令すると、少女は躊躇いもなく、鋭い歯を柔らかい皮膚に突き刺した。

喉に流れる温かさに恍惚とした表情を浮かべる。なんども吸っては噛み、噛んでは吸ってを繰り返して、気が済んだのか、ノエルから離れた。

「ちと吸いすぎだぜ、アンタ」
「……………飲めと言ったのは、きみ」

余裕が出来たのか、掠れた声ではあるが会話ができた。

「アンタ、名前は？俺はノエルっているんだけど」

「無い」

「え……………無いのか？」

「無い。正確には、覚えてない。忘れた」

そう言う彼女の瞳は、過去も未来も映していなかった。

「んー……………なら、俺がつけてやる」

「え……………？」

「安心しろ。ネーミングセンスはいいつもりだぜ。アンタ、可愛い顔してるし」

「……………か、可愛くはない……………かな」

照れたように顔をうつ伏せる吸血鬼。

ノエルはしばらく考えて、自分の好きな花の名前を思い出した。

「リリー」

そつと囁くような呼び掛けに、吸血鬼は顔を上げる。

「リリー。今日からそれがアンタの名前。わかったか？」

「リリー……………リリー……………私は、リリー……………」

白い薄い花弁。部屋にも飾ってある、とても良い香りのする花の名前。

リリーと名付けられた吸血鬼は、その花のように微笑んだ。

「ありがとう……。なら、私も……。私も、きみに贈りたい」

「ほへえ？なんだよ、熱烈なキスか？」

冗談交じりにそう言ったノエルの頬を、そつと両手で包んで。リリーが彼の唇に自らの唇を重ねる。ノエルの口内に広がったのは、鉄の味。それがリリーの血だと気づき、目を白黒させる。

「へ……」

「私は、きみとずっといる。血の契約……。でしょう。私は、これを覚えてる。これだけ覚えてる。こうすれば、きみと私は、ずっといっしょ」

ゴクリと喉をたてて血を嚥下すれば、体中が熱くなる。

吸血鬼としての本能は忘れていないらしい。血の契約をすれば、主従関係になることを、リリーはしっかりと本能から覚えていた。立ち上がり、狼狽えるノエルに跪く。

「私は、あなただけの吸血鬼だ」

戯れ

血の契約。

吸血鬼が自らの血を人間に与え、自分のものだとして所有権を主張するものだ。これにより、他の吸血鬼はその人間の血を飲むことができなくなる。犬などに例えれば、マーキングと同じだ。

その代わり、吸血鬼はその契約者が生涯を終えるまで、一生付き従わなければならない。

長い寿命の暇つぶしとして契約をする吸血鬼も多いと聞く。

まさか、自分自身が契約者になるなんて、思ってもみなかったが。

「おいアンタ。ちょっとコイツ風呂入れてくれ。あと、女物の服出してやれ。アンタのでもいい」

「か、かしこまりました」

屋敷に戻って、そう女中にリリーを任せ、ノエルはひとり部屋に戻った。女中は汚らしいリリーを見て目を剥いていたが、ノエルは何も言うなと睨みつける。

両親にはなんと言おうか。塔から連れてきたなどと言えば、それこそ叱咤だけではすまないかも知れない。

「ロブスターみてえに赤くなるのかねえ。いやだいやだ」

そう独り言を呟きながらも、今回の好奇心によって得ることにな

った吸血鬼の存在に心躍らせた。

吸血鬼。いままでは両親から、彼らに関わることはまだ早いと言われてきたのに。いきなり血の契約を結んだと知ったら、どう思うだろう。

昔から旺盛な好奇心は抑えることができない。子どもがやるようなイタズラはやり尽くした。そのたびに両親から大目玉を食らっていたが、今回はどんなふうにも怒られるのだろう。

もしかしたら、自分はマゾなのかもと考えを巡らせていると、ノックも無しに部屋の扉があいた。

「……………へえ」

入ってきたのは、リリーだった。

いや、詳しく言えば。みすばらしい姿はしておらず、髪の毛もボサボサではなく、肌も艶やかで汚れなどない。

見違えるほど美しくなったリリーがそこにいた。長すぎた髪の毛は少し切ったのだろうか。腰までになっている。吸血鬼の眼球にとっては明るすぎなのか、少しだけ眩しそうに目を細めた。

「いいねえ、似合ってる。綺麗だ」

「キレイ……………綺麗……………。優しい、きみ」

「きみじゃなくて、ノエルだ。俺の名前。アンタの契約者」

リリーはこくこくと頷き、

「ノエル……………ノエル……………マスターは、ノエル……………」

自分自身に言い聞かせるように呟く。

さっきまではまったく見えなかった顔がそっとノエルを見る。儂げな美しい吸血鬼だった。年齢はノエルより少し年下ほどだろうが、

吸血鬼というには、もう何十年、何百年と生きているのだろう。

けれど、記憶を無くしている彼女は、ノエルにとっては歳相応の少女と同じだった。

繰り返し呟いていた呼応が止み、リリーが顔を上げる。

「ノエル」

彼女が口にした契約者の名前。

ノエルは満足そうに笑い、彼女の手の甲に、そっと口づけをしたのだった。

「さあて。最初は、言葉の練習な。アンタ、つたないから」

「ずっと喋って……なかつたから、舌がもつれて……上手くできない」

「ずっとつてどのくらいだ？」

「……覚えてない」

正確には、忘れたのほうが正しいのだろう。彼女の欠落した記憶がどういったものなのか、どうして記憶が無いのか、色々と興味があるが本人が覚えていないのだから、仕方がない。

ノエルはそれ以上その件には触れず、何か食べたいものはあるかと尋ねた。どうせ長年塔で監禁されており、何も食べてはいなかったのだろう。

「血はもうやったけど……アンタらは普通に人間と同じものも食うんだろ」

「おなかすいた……」

「だから、何食べたい？言えよ、リリー」

「……ケーキ」

口から出た少女らしい言葉に、ノエルも吹き出した。

用意させたスイーツを平らげ、静かに寝息をたてているリリーを、優しくノエルが見下ろす。

ソファで横になったまま寝てしまったのだろう。艶やかな黒髪に指を絡ませる。見違えるほどまっすぐなその髪は、指に引っかかることなく、サラリとした感触だった。

「最高にラッキーだ」

ノエルはそう呟く。

いままで謙遜気味に見られた吸血鬼が、自分の手の中にある。無防備に寝顔を晒している。他にも吸血鬼と契約している者はいるのに、両親は絶対にそれを許さなかったのだから。

髪を指に絡ませて遊んでいると、ピクリとリリーの手首が動く。起こしてしまったのかと思ったが、そうではなかった。

ゆっくりと瞼を開き、次に上半身を起こすリリー。辺りを見渡し、途端に目付きが鋭くなる。

「どっしたよ」

「……マスターノエル。静かに」

豹変したりリーの口調に、ノエルが怪訝な表情になる。

「……同族の匂いがする」

「吸血鬼か？」

「うん……。だけど、首輪付き」

「そりゃあ、飼い主がいるってことだろうな。アンタ、そういうのわかるのか」

無言で頷き肯定の旨を伝えて、リリーがソファから立ち上がる。記憶は無くしても、本能だけは根強く残っているらしい。

「……ああ、来訪客だな。分かった」

「どういうこと……？」

「安心しなされ、お嬢ちゃん。来たのはねえ、俺の幼なじみちゃんだから」

「……なじみ？」

首を傾げるリリー。彼女の後ろで、今度もノック無しに扉が開かれる。

入ってきたのは、赤毛の長身の青年と、銀髪で眼帯をしている青年だった。

「ノエル、元気にしてたかア？」

「お久しぶり」

馴染み深い顔を見て、ノエルが若干嫌そうな顔をする。初対面であるリリーは戸惑っているが、その視線は銀髪眼帯の青年に移る。強い警戒心を伴って。

それに気づいたノエルは、彼らを指し示して紹介した。

「俺の幼なじみのキツシュ・フィオーネ。んで、こちらの銀髪さん

「がアンタの気にしてるニツク。キツシユと契約している吸血鬼ってわけ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3972z/>

Blood Lily

2011年12月15日00時45分発行